

肢体不自由者の移動の困難性に対する高校生の意識

聖心女子大学大学院 小川奈々
聖心女子大学 植田誠治

I. 問題の所在と目的

今日、町のバリアフリー化が進められ、障害の有無に関わらず誰もが暮らしやすい環境が目指されている。その一方で、点字ブロックが車いす使用者にとっては移動の障壁になっていることをはじめ、すべての人が暮らしやすい環境にはなっていない(富樫・水野・徳田, 2007)。また、障害者が外出すると周囲からの視線が気になるなど、意識の面においても誰もが暮らしやすい環境を整えるためには、意識の面においても障害の有無に関わらずともに生活する環境を整えることが必要である。

これまでに行われている障害者に対する意識や態度についての研究では、障害者との接触経験や知識があると、障害者に対する好意イメージや受容的態度をもつようになること(生川, 1995、石川・小畔, 2001、奥・牛尾, 2001、森田・是枝, 2008)、接触経験の有無よりも、一緒に学校生活を送った経験がある、ボランティアをした経験があるといった障害者との関わり方が重要であることなど(田川・本谷, 2005)、障害者に対する意識とともに意識に関連する要因が明らかにされている。しかしながら、明らかにされている障害者に対する意識は、障害者の能力、障害者の教育などに関する障害者に対する認識や障害者との接し方であり、障害者の困難に対する意識についての検

討は十分に行われていない。また、障害者に対する意識の研究において、大学生の意識について調査した先行研究はあるものの(河内, 2004)、高校生の意識について調査したものは見あたらない。

ところで、障害や障害者に対する意識は、障害の種類により異なると考えられる。そのため、障害や障害者に対する意識の検討を行う際には障害の種類を特定する必要がある。以上をふまえ、本研究では、高校生を対象とし、肢体不自由者の移動の困難性についての意識を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象者

都内公立高校3校に調査を依頼し、272名から協力を得た(男性133名、女性139名)。平均年齢は16.3歳($SD=1.1$)であった。なお、調査項目の半数以上を回答していない22名を除き、250名(男性124名、女性126名)を分析の対象とした。

2. 調査手続き

2011年7月に無記名式の質問紙による調査を実施した。調査時間は15分であった。

3. 調査内容

まず、性別、障害に関する学習経験に関することを含む、調査対象者自身に関する項目に対する回答を求めた。

障害に関する学習経験においては、学習経験の有無に関する回答を求め、学習

経験がある場合には、その内容を 1.障害者に対するボランティア、2.障害者から直接話を聞いた、3.障害や障害者に関して調べた、4.ブラインド体験、5.盲導犬体験、6.手話体験、7.車いす体験、8.点字体験、9.体に重りを付ける体験、10.その他の 10 項目より複数選択の回答を求めた。さらに、1.障害者に対するボランティアおよび 2.障害者から直接話を聞いた、3.障害や障害者に関して調べたとする項目を選択した場合には、学習した障害の種類を 1.視覚障害、2.聴覚障害、3.肢体不自由、4.知的障害、5.発達障害、6.精神障害、7.その他から、複数選択により回答を求めた。

次に、肢体不自由者の困難に対する意識を明らかにするために、町の中で肢体不自由者が困難を感じる箇所について、人とすれ違う時にぶつかりそうになる（西館・水野・徳田、2006）、点字ブロックがあると移動しにくいなど（富樫ら、2007）、これまでに明らかにされてきた肢体不自由者の困難を含むイラストを作成し（図 1）、それを提示して、イラストの中の肢体不自由者（Aさん）が感じる困難に関して、可能な限り多くの自由回答を

求めた。ところで、困難に対する意識は障害の種類とともに、障害の程度によって異なると考えられる。そのため、この時の障害は、「身体の片側を動かすのに困難があり、特に、片方の手や足は動かすのに難しい。歩く時には、杖を使い、ゆっくりしか移動できないが、一人で外出する」という状態を設定した。

さらに、肢体不自由者に対する手助けに関する意識を明らかにするために、まず、自分が肢体不自由者だと仮定した時に困難な状況において、周りの人に望む行動に関する回答を求めた。この時、坂の上の店に行こうとしている時（以下、坂道とする）、横断歩道を渡ろうとしている時（以下、横断歩道とする）の 2 場面を困難な状況として設定した。その上で、それらの状況においてどのような行動を望むか、1.すぐに助けてほしい、2.声をかけてほしい、3.見守ってほしい、4.放っておいてほしい、5.その他からの単一選択により回答を求めた。また、肢体不自由者が困難な状況にある時に困難に対してどのように対応するかに関して、困難な状況で周りの人に望む行動の設定と同様に

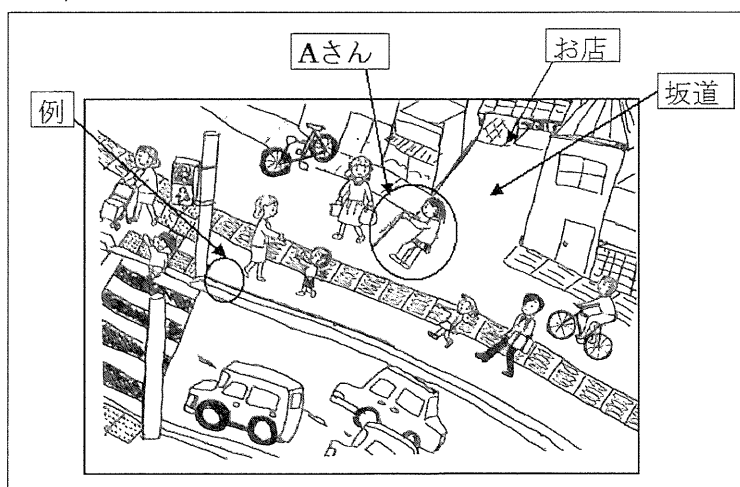


図 1. 調査用イラスト

坂道と横断歩道を困難な状況として設定し、どのような行動をとるか、1.すぐに助ける、2.声をかける、3.見守る、4.何をしたらよいか分からない、5.何もしない、6.その他からの単一選択により回答を求めた。

4. データ分析の方法

2群間の平均の差には t 検定を用い、クロス集計による検定には χ^2 検定を用いた。クロス表の1つのセルの数値が5以下となる場合には Fisher の直接法を用いた。また、有意水準は5%とした。統計処理には SPSS 20.0 for Windows を用いた。

III. 結果と考察

1. 調査対象者の学習経験

障害に関する学習経験があると回答したのは77.2%、ないと回答したのは22.8%であった。学習経験の内容は、表1に示すとおりであり、上位の項目は、車いす体験の58.0%、手話体験の56.4%、点字体験が53.6%であった。また、障害者から直接話を聞いたとの回答も45.6%であった。しかしながら、障害に対するボランティアと障害や障害者について調べたとする回答は15%に満たなかった。

このように、学習経験の中でも体験学習を受けている生徒が多かった。すなわち、町の中の困難に関して、体験学習からの知識がある者が多いのではないかと考えられる。

2. 肢体不自由者の困難に対する意識

町の中で肢体不自由者が困難に感じる箇所の回答個数については、平均2.4個 ($SD=1.4$) の回答を得た。

次に、町の中の困難として挙げられた回答の内容をイラストに照らし合わせ、示すものを項目として表2のようにまとめたところ、無回答を含めて24個の項目が挙げられた。

回答された項目の上位は、後ろからの自転車の42.8%、駐輪の36.8%、坂道全般の34.8%、横断歩道全般の33.6%であった。それに対し、親子、信号機、交通量の多さ、車道との境界、下り坂、店のドア、店の前の溝、荷物、杖、障害物の10項目は回答した者が5名以下であった。

このように、24項目が困難として挙げられたが、回答が10%を超えるものは、全項目のうち30%に満たなかった。すなわち、肢体不自由者が感じる困難に関しては、多くの者が困難だと意識する項目

表1. 障害に関する学習経験の内容 人 (%)

車いす体験	145 (58.0)
手話体験	141 (56.4)
点字体験	134 (53.6)
障害者から直接話を聞いた	114 (45.6)
ブラインド体験	62 (24.8)
体に重りを付ける体験	49 (19.6)
障害者に対するボランティア	34 (13.6)
障害や障害者に関して調べた	33 (13.2)
盲導犬体験	13 (5.2)
その他	14 (5.6)

表 2. 困難な箇所

		人(%)		
		全体 (n=250)	車いす経験 あり (n=145)	なし (n=105)
自転車	後ろからの自転車	107 (42.8)	67 (46.2)	40 (38.1)
	駐輪	92 (36.8)	50 (34.5)	42 (40.0)
	全般	39 (15.6)	22 (15.2)	17 (16.2)
人	子ども	29 (11.6)	18 (12.4)	11 (10.5)
	前の人	17 (6.8)	8 (5.5)	9 (8.6)
	人ごみ	17 (6.8)	7 (4.8)	10 (9.5)
	親子	1 (0.4)	1 (0.7)	0 (0.0)
横断歩道	全般	84 (33.6)	54 (37.2)	30 (28.6)
	車	9 (3.6)	5 (3.4)	4 (3.8)
	信号機	4 (1.6)	3 (2.1)	1 (1.0)
	交通量の多さ	3 (1.2)	1 (0.7)	2 (1.9)
歩道	全般	19 (7.6)	10 (6.9)	9 (8.6)
	点字ブロック	11 (4.4)	7 (4.8)	4 (3.8)
	車道との境界	4 (1.6)	4 (2.8)	0 (0.0)
坂道	全般 ^(*)	87 (34.8)	59 (40.7)	28 (26.7)
	上り坂	49 (19.6)	32 (22.1)	17 (16.2)
	下り坂	2 (0.8)	2 (1.4)	0 (0.0)
店	全般	10 (4.0)	4 (2.8)	6 (5.7)
	店のドア	5 (2.0)	4 (2.8)	1 (1.0)
	店の前の溝	2 (0.8)	2 (1.4)	0 (0.0)
その他	荷物	1 (0.4)	1 (0.7)	0 (0.0)
	杖	1 (0.4)	1 (0.7)	0 (0.0)
	障害物	1 (0.4)	0 (0.0)	1 (1.0)
無回答		16 (6.4)	8 (5.5)	8 (7.6)

下線は有意に多いことを示す
(※の項目は $p<0.05$, χ^2 検定による)

とともに、少数の者のみが気付く困難な箇所があるなど、内容が多岐にわたることが明らかになった。

以上のように、肢体不自由者がこれまでに困難であるとしてきた坂道（高山・植村, 1998）、点字ブロック（富樫ら, 2007）なども困難な箇所として認識された。しかしながら、坂道に関しては 34.8%が困

難として認識しているのに対し、点字ブロックは 4.4%と、わずかしが認識されていないなど高校生の肢体不自由者の困難に対する認識には不十分な点もあった。

本研究における対象者は体験学習を経験している者が多く、肢体不自由者が感じる困難な箇所に気が付く要因となっているのではないかと考えられる。そこで、

学習経験の中でも肢体不自由に関連する車いす体験の有無による意識の違いを分析したところ、車いす体験がある場合には平均 2.5 個 ($SD=1.3$)、ない場合には平均 2.2 個 ($SD=1.4$) の回答を得た。車いす体験がある場合とない場合の間で回答個数の差は認められなかった。次に、車いす体験がある場合には無回答を含めて 23 項目、ない場合には無回答を含めて 18 項目の困難が挙げられた。このうち 16 項目は車いす体験がある場合とない場合において同じ内容であった。それに対し車いす体験がない場合においてのみ挙げられた項目は障害物の 1 項目であり、その他の 7 項目は車いす体験のある場合においてのみ困難として挙げられた。

また、車いす体験がある場合には後ろからの自転車、坂道全般が 46.2%、横断歩道全般が 40.7%、横断歩道全般が 37.2% となり、上位を占める回答であった。それに対し、車いす体験がない場合に上位となった項目は、駐輪の 40.0%、後ろからの自転車の 38.1%、横断歩道全般の 28.6% であった。困難として挙げられた項目のうち、坂道全般は車いす体験がある場合のほうがない場合よりも有意に回答が多かった ($p<.05$ 、 χ^2 検定)。車いす体験がない場合のほうがある場合よりも有意に回答が多い項目は認められなかった。

以上のことから、車いす体験がある場合とない場合では、坂道における認識の違いがみられたものの、回答個数やその他の項目では違いは認められなかった。

すなわち、肢体不自由者が感じる町の中における困難の認識に対する、車いす体験の有無の影響は少ないのではないかと考えられる。

3. 手助けに関する意識

(1) 周りの人に望む行動

まず、坂道における意識は表 3 のようになり、見守ってほしいとする回答が最も多く 41.6% となった。それに対し、すぐに助けてほしいとする回答は 4.8% となり、回答は 10% に満たなかった。すなわち、見守りを望み、すぐに手助けされることは望まないとする意識が明らかになった。このことに関して、車いす体験がある場合とない場合の回答状況には有意差が認められた ($p<.05$ 、Fisher の直接法)。いずれの場合も、見守ってほしいとする回答が最も多く、すぐに助けてほしいとする回答が最も少なかった。しかしながら、2 番目に回答が多い項目は、車いす体験がある場合には声をかけてほしいであるのに対し、車いす体験がない場合には放っておいてほしいであった。

次に、横断歩道では表 4 のように見守ってほしいとする回答が 42.0% と最も多くなった。それに対し、すぐに助けてほしいとする回答は 6.4% となり、回答は 10% に満たなかった。すなわち、坂道と同様に見守りを望みすぐに手助けされることは望まないとする意識があることが明らかになった。また、車いす体験がある場合とない場合の回答状況には有意差が認められた ($p<.01$ 、Fisher の直接法)。

表 3. 周りの人に望む行動 (坂道)

		人(%)				
		すぐに 助けてほしい	声を かけてほしい	見守って ほしい	放って おいてほしい	その他
全体	($n=250$)	12 (4.8)	61 (24.4)	104 (41.6)	60 (24.0)	13 (5.2)
車いす経験	あり ($n=145$)	5 (3.4)	42 (29.0)	65 (44.8)	27 (18.6)	6 (4.1)
	なし ($n=105$)	7 (6.7)	19 (18.1)	39 (37.1)	33 (31.4)	7 (6.7)

* : $p<.05$, Fisher の直接法による

表 4. 周りの人に望む行動（横断歩道）

		人(%)				
		すぐに 助けてほしい	声を かけてほしい	見守って ほしい	放って おいてほしい	その他
全体	(n=250)	16 (6.4)	65 (26.0)	105 (42.0)	50 (20.0)	14 (5.6)
車いす体験	あり (n=145)	6 (4.1)	45 (31.0)	65 (44.8)	20 (13.8)	9 (6.2)
	なし (n=105)	10 (9.5)	20 (19.0)	40 (38.1)	30 (28.6)	5 (4.8)

** : $p < .01$, Fisherの直接法による

車いす体験がある場合、ない場合のいずれも見守ってほしいとする回答が最も多く、すぐに助けてほしいとする回答が最も少なかった。しかしながら、車いす体験がある場合には声をかけてほしいが2番目に多い回答であるのに対し、車いす体験がない場合には放っておいてほしいとする回答であるという違いが認められた。

このようなことから、自分が肢体不自由者だと仮定した時に、高校生は状況に関らず、見守りを望むことが明らかになった。また、高校生はすぐに助けられることを望んでいないことから、必要な時に手助けを求められる状況を望みながら、常に手助けを必要とほしめない意識していることが伺える。すなわち、人に頼らずできることは自分自身でやるべきであるという意識があるのではないかと考えられる。さらに、車いす体験がある場合とない場合では回答状況に差が認められたことから、肢体不自由者の立場を想定することに関する意識の違いが車いす体験の有無によって現れるのではないかと考えられる。特に、車いす体験がある場合には見守ってほしいとする回答と、声をかけてほしいとする回答が他の項目より多かったことから、車いす体験があるほうが、より周りの人に注意を向けてほしいと望むのではないかと考えられる。

(2) 肢体不自由者に対する対応

まず、坂道では表 5 のように、見守る

とする回答が 39.6%と最も多かった。それに対し、すぐに助けるとする回答は 2.4%となり、10%に満たなかった。すなわち、見守りをする意識はあるものの、すぐに助けることは、考慮に入っていないことが明らかになった。また、車いす体験がある場合、ない場合とも、見守るとする回答が最も多く、すぐに助けるとする回答は最も少なかった。車いす体験がある場合とない場合の回答状況に差は認められなかった。

次に、横断歩道では表 6 のように見守るとする回答が 44.0%と最も多かった。これに対し、すぐに助けるとしたのは 4.4%となり 10%に満たなかった。すなわち、横断歩道においても見守るものの、すぐに助ける意識はないことが明らかになった。このことに関して、車いす体験がある場合、ない場合とも、見守るとする回答が最も多く、すぐに助けるとする回答は最も少なかった。また、車いす体験がある場合とない場合の回答状況に差は認められなかった。

このように、どの状況においても肢体不自由者を見守り、注意を向けるものの、すぐに手助けはしない意識が明らかになった。また、何をしたらよいか分からないとする回答も見守るとする回答の次に高かった。すなわち、肢体不自由者に注意を向ける一方で、何をしたらよいか分からないのではないかと考えられる。さらに、車いす体験の有無による意識の違

表 5. 肢体不自由者に対する対応（坂道）

		人(%)					
		すぐに 助ける	声を かける	見守る	何をしたら よいか分からない	何もしない	その他
全体	(n=250)	6 (2.4)	38 (15.2)	99 (39.6)	59 (23.6)	39 (15.6)	9 (3.6)
車いす経験	あり (n=145)	1 (0.7)	22 (15.2)	65 (44.8)	32 (22.1)	20 (13.8)	5 (3.4)
	なし (n=105)	5 (4.8)	16 (15.2)	34 (32.4)	27 (25.7)	19 (18.1)	4 (3.8)

表 6. 肢体不自由者に対する対応（横断歩道）

		人(%)					
		すぐに 助ける	声を かける	見守る	何をしたら よいか分からない	何もしない	その他
全体	(n=250)	11 (4.4)	42 (16.8)	110 (44.0)	45 (18.0)	30 (12.0)	12 (4.8)
車いす経験	あり (n=145)	3 (2.1)	27 (18.6)	70 (48.3)	23 (15.9)	14 (9.7)	8 (5.5)
	なし (n=105)	8 (7.6)	15 (14.3)	40 (38.1)	22 (21.0)	16 (15.2)	4 (3.8)

いはみられず、肢体不自由者に対する行動に関しての意識に車いす体験は影響しないものと考えられる。車いす体験では、怖さや大変さ、肢体不自由者が手助けを必要とすることを知ることができる。しかしながら、肢体不自由者がどのように困難を感じ、何を望むかを知ることが困難なのではないかと考えられる。そのため、適切な介助の方法や障害者の望む意識を学習に組み込むことが適切な行動に繋がるのではないかと考えられる。

IV. まとめ

本研究では、肢体不自由者の移動の困難性に関する高校生の意識を明らかにすることを目的とした。その結果、肢体不自由者が感じる町の中の困難の回答個数の平均は2.4個であり、内容は多岐にわたった。しかしながら、高校生の肢体不自由者の困難に対する認識は多くが困難とするものもあれば、肢体不自由者が困難としながらも少数の認識しか得られていないものもあった。次に、自分が肢体不自由者だと仮定した時には、見守りを望み、すぐに助けられることは望まないことが明らかになった。最後に、肢体不自由

者が困難な状況にある時には、見守るがすぐに助けないという意識が認められた。このうち、車いす体験の有無による意識の違いが認められたのは、町の中にある肢体不自由者が感じる困難のうち坂道全般と、自分が肢体不自由者だと仮定した場合に周りに人に望む行動であった。町の中の困難の回答数や肢体不自由者が困難な状況にある時に取る行動に関しては、車いす体験の有無による意識の違いはなかった。

このように高校生の意識として、肢体不自由者の困難について平均 2.4 個の認識をしており、内容は多岐にわたるものの少数の認識しか得られていないものがあること、肢体不自由者が困難な状況にある時には注意を向けることが明らかになった。また、車いす体験の有無による意識の違いは主に、自分が肢体不自由者だと仮定した時に周りの人に望む行動において現れることが明らかになった。これまでの研究においては、障害に対する知識が障害者に対する意識に関連するとされている（生川，1995、石川・小畔，2001）。本研究においては、町の中の困難の認識や肢体不自由者が困難な状況にあ

る時に取る行動に関しては車いす体験の有無による意識の違いは認められず、学習体験からの知識が肢体不自由者に対する全ての意識に関っているとはいえなかった。しかしながら、周りの人に望む行動においては、意識の違いがあったことから、肢体不自由者の立場を想定するという面において、車いす体験が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。すなわち、車いす体験は、肢体不自由者の立場の理解に有効な手段となり得るのではないかと考えられる。

また、本研究においては、肢体不自由者が困難な状況にある時に、見守るとする者と何をしたらよいか分からないとする者がおり、学習の内容等により意識の違いがあると考えられる。しかしながら、本研究においては学習の方法、取り組み方などの詳細の部分については明らかにされていない。学習の方法や取り組み方、その時の障害に対する感じ方が障害者に対する意識に関することはこれまでの研究において明らかにされている（田川・本谷，2005）。さらに、加藤（2007）も障害者に対する援助に対しては、学習の必要性を指摘している。そのため今後は学習の方法や取り組み方など、障害に関する学習経験の詳細な内容を考慮した研究を行う必要がある。

さらに、少数ではあるもののイラストの分かりにくさを指摘する生徒もあった。周りの人に望む行動、肢体不自由者に対する行動についても、状況によるとする回答があった。本研究においては、様々な困難を含むイラストの中で、どの程度肢体不自由者の困難を認識できるかに着目したため、そのような回答があったのだと考えられる。今後は、困難を分りやすく示した場合には困難として認識されやすくなるかなども検討する必要がある。

また、障害者の意識を明らかにした上で、障害者の困難に関する、さらに多くの場面を設定し、障害や障害者に対する意識の研究を行うことが必要である。そのことにより、障害者に対する意識がより明確になるのではないかと考えられる。

それらの本研究による課題に加え、これまでの研究においては、発達段階についても障害や障害者に対する意識に関連することが明らかにされている（西館，2007、豊村・佐藤，2008）。しかしながら、本研究では、障害や障害者に対する意識と発達段階の関連は明らかにされていない。そのため、今後は発達段階を考慮した研究が必要である。

文献

- 稲垣貴彦（2007）身体障害者の外出についての実態調査，中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要，8，127-134.
- 石川杏子・小畔彩子（2001）大学生における知的障害児への態度に関する研究—知識量と接触経験の質との観点から—，明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要，6，25-34.
- 加藤聖子（2007）高校生の福祉意識，藤女子大学 QOL 研究所紀要，2(1)，55-63.
- 河内清彦（2004）障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件，対人場面及び個人的要因の影響，教育心理学研究，52(4)，437-447.
- 森田有里沙・是枝かな子（2008）通常学級と特別支援学級の交流教育の取り組み—小学生の障害の理解を中心に—，高知大学教育実践研究，22，13-22.
- 生川善雄（1995）精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験、性、知識との関係—，

- 特殊教育学研究, 32(4), 11-19.
- 西館有沙 (2007) 肢体不自由者の交通バリアフリーに関する子どもの認識とその発達的变化, 障害理解研究, 9, 71-81.
- 西館有沙・水野智美・徳田克己 (2006) 肢体不自由者の交通バリアフリーのための教育のニーズに関する調査研究—交通バリアフリー教育と交通サバイバル教育について—, 障害理解研究, 8, 1-10.
- 奥祥子・牛尾禮子 (2001) 女子短期大学生の障害をもつ人に対する印象, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 12 (1), 15-19.
- 田川元康・本谷望 (2005) 障害児の統合教育に対する保育系女子大学生の意識 (2), 京都女子大学発達教育学部紀要, 1, 21-29.
- 高山佳子・植村潔 (1998) 肢体不自由者とその介助者からみた空間移動に関する諸問題, 横浜国立大学教育人間科学部紀要.I 教育科学, 1, 49-66.
- 富樫美奈子・水野智美・徳田克己 (2007) 車いす使用者の移動においてバリアとなっている点字ブロック, 障害理解研究, 9, 49-57.
- 豊村和真・佐藤麻衣子 (2008) 障害者に対する態度に関する横断的研究(1), 北星論集(社), 45, 77-87.

Consideration showed by High School Students toward the Difficulties faced by Persons with Physical Disabilities during Movement.

This study explored high school students' consideration of persons with physical disabilities and the difficulties they face when moving from one location to another. In July 2011, a questionnaire survey was conducted for 272 second-grade students in high school (133 boys and 139 girls) from three public schools; of these, the responses of 250 students (124 boys and 126 girls) were considered eligible.

On an average, 2.4 difficulties were recognized as being associated with movement in a town. Moreover, the students answered questions pertaining to 24 difficulties that persons with disabilities were expected to encounter. Further, when the students themselves had physical disabilities and faced difficulties in a town, they expected people around them to be concerned but not help. Finally, when students observed persons with physical disabilities in difficult situations, they were concerned about them. The question "What did they expect from the people around them?," assuming that the students themselves had physical disabilities and faced difficulties in a town, yielded different responses from those who had experienced using a wheelchair and those who had not experienced this.